

第5回日英シンポジウム

日英シンポジウムとは

日本化学会と英国王立化学会 (Royal Society of Chemistry; RSC) は両国の交流の一層の促進を図るために、次世代を担う若手・中堅研究者を主体とするシンポジウムを行っている。2007年の大阪を皮切りに、ほぼ1年おきに日本と英国で交互に開催されている。本シンポジウムでは、双方化学会の合意の上、特定テーマを決定し、その分野における気鋭の研究者を中心に、活発な講演及び交流がなされている。

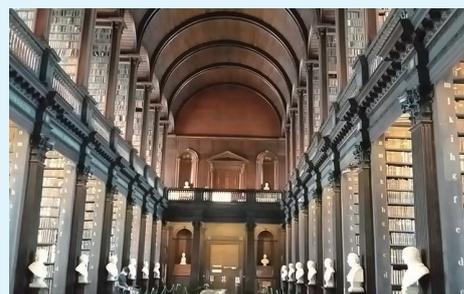
ダブリン

今回の日英シンポジウムは英国を離れて、隣国アイルランドのダブリンで行われた。ダブリンはアイルランドの政治・経済・文化の中心地であり、アイルランドの全人口のおよそ3分の1が集中する。ビール好きにとっては、黒スタウトで有名なギネスの創業地として、よく知られた街である。また、市の中心には、400年以上の歴史と伝統があり、オクスフォードやケンブリッジ大学と並んで英語圏最古の大学として知られる Trinity College Dublin がある。この図書館に

は、世界で最も美しい本とも呼ばれる「ケルズの書」が収蔵されていることから、ダブリンの観光名所の1つになっている。英国同様、ダブリンでも雨に降られる日が多いのだが、今回の滞在中は天候に恵まれ、ほとんど傘を必要としなかった。

シンポジウム

7月1日に第5回目となる日英シンポジウムが Trinity College Dublin のキャンパス近くのホールで行われた。事前に Lesley Yellowlees RSC 会長と榊原定征 日本化学会会長の挨拶文を含んだ講演要旨集 (<http://www.chemistry.or.jp/activity/international/index.html>) が配布された。講演に先立ち、日本化学会から川島信之 常務理事、RSC から CEO の Robert Parker が、それぞれの学会の概要と将来展望を紹介してシンポジウムがスタートした。今回は、超分子化学にフォーカスしたテーマが設定され、日本化学会及び RSC サイドから6名の研究者が集った。講演順に、高島義徳 (阪大)、Thomas D. Bennett (Cambridge)、牧浦理恵 (阪府大)、Kim E. Jelfs (Imperial College London)、植村卓史 (京大)、Wolfgang Schmitt (Trinity College Dublin) がそれぞれの最新のデータも交え、研究成果を発表した。ホスト・ゲスト相互作用を用いた機能性材料創製や多



Trinity College Dublin の図書館

孔性物質の制御合成、ナノ空間を用いた反応・物性制御などに関して、次々とインパクトの高い研究に関する発表が行われ、活発な議論が続いた。最後に、Yellowlees RSC 会長から、共同研究などを進めることで、より一層の交流が深まることを望むという言葉でシンポジウムは締めくくられた。

シンポジウムの後に

日英シンポジウムに引き続き、7月4日まで RSC が主催する International Symposium on Advancing the Chemical Sciences (ISACS13) が同会場にて行われた。無機及び材料化学に焦点を当てた ISACS13 では、世界各国から集まった一流の化学者による講演が行われた。日英シンポの講演者も ISACS13 に出席する機会をいただき、両シンポ合同の講演者ディナーも楽しんだ。RSC スタッフも交えた化学談義は場所をパブに変えても尽きることなく、大いに盛り上がった。もちろん、1パイントのギネス (もしくはアイリッシュウイスキー) を片手に。

[植村卓史 (京都大学大学院工学研究科)]

© 2014 The Chemical Society of Japan

